

研究プロジェクト

現代における自己意識・他者意識の研究

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■ 問題意識

心理療法は、フロイトの『夢判断』が1900年に出版されたように、19世紀末から20世紀のはじめに成立し、西洋における自己意識や主体の成立を前提にしている。つまり自分で自分のことを見つめるという自己意識のために心理療法の対象となる神経症の問題が引き起こされ、またそれを治療するための心理療法が可能となるという構造になっていた。心理療法が自主的な来談を前提にしているように、主体性があること、自己関係や自分の内面の成立ということは、心理療法にとって欠くべからざる条件であった。

それに対して、日本で心理療法を行おうとすると、自他の分離が曖昧であったり、人間主体だけではなくモノに魂を認めたりするような前近代的な意識が残っているのを考慮する必要がある。それはよい意味では、箱庭療法の普及などにつながってきた。それと同時に、近年においては、解離症状や自傷・犯罪などの行動化する問題、さらには発達障害が増えてきており、それらにおいては、葛藤や自意識の問題というのが認められない。これはある意味で、心理療法というパラダイムそのものを揺るがすほどになっており、近代意識を飛び越えた「ポストモダンの意識」ということが言えると考えられる。

そこで本プロジェクトでは、一方で日本古来の意識やあり方を、主に『遠野物語』の新しい〈読み〉の検討を通じて研究し、他方で近代意識を飛び越えたような意識を、心理療法の実際やそこで生じてくるイメージ、さらには現代の文学作品から探ってきた。

■ 『遠野物語』の新しい〈読み〉

日本古来の意識がどのようなもので

あったかを知り、またそれがどのように新しいあり方の可能性に開かれているかを検討するためサブプロジェクトである「遠野物語の新しい〈読み〉」では、臨床心理学者と赤坂憲雄を中心とする民俗学者と一緒に『遠野物語』を読み、そこから日本古来のあり方や意識を読み取ってきた。

その中では、この世とあの世の境界があいまいであること、動物、山人などの異質の他者に出会う瞬間に境界と意識が成立すること、また古来の意識も、『遠野物語』のいくつかの物語の比較で歴史的な変遷がうかがわれることが明らかになってきた。研究会では、「山」、「ザシキワラシ」、「動物」などにテーマをしばって、それぞれが自分の視点で解釈する研究会も何度か開かれた。たとえば「山」に関して、定点としての「石」と「小屋」に着目されるなどのように、臨床心理学者と民俗学者が意外に同じものに注目することが興味深く、相互の視点の交流によって、考え方を深めることができた。

これらの成果の一部は、既に『東北学研究』などに発表されたが、1つの論集としてまとめる方向で進んでいる。

■ 心理療法の新しい展開

現代の意識の特徴については、連携研究員の田中康裕や岩宮恵子が心理療法においてイメージや内面が扱われることが少なくなってきたこととして報告してきている。それは症状としては、日本人の代表的な神経症であった対人恐怖的な訴えが減少し、解離や発達障害的な様相を呈するものが増えてきていることに現れている。それに対して、心理療法においても、直接的な関わりが求められたり、セラピストとの関係を通じて境界を認識し、主体を確立するような方向が必要となって

きたりしている。

■ 村上春樹と現代の意識

村上春樹の作品には、共同体や親と戦って主体を確立し、自分自身に責任を持つような近代意識をうち立てるという課題が意味を持っていて、既にバラバラになって生きているような人間が多く見られる。これはまさに近代意識を飛び越えた「ポストモダンの意識」のあり方を描いているように思われる。たとえば『スプートニクの恋人』に登場する、夏目漱石の『三四郎』の冒頭部分との比較を意識したエピソードが示しているように、近代意識の「禁止」、「個人の人格の連続性」、「葛藤」などがポストモダンの意識には認められず、瞬時につながっては離れるような意識になっている。

『1Q84』は、このような状況についての、物語として個人としての1つの生き方を示唆するものとなっていると考えられた。

参考文献

岩宮恵子『フツの子の思春期』岩波書店、2009年。
河合俊雄『村上春樹の「物語」』新潮社、2011年。